



郷土史

ていね

第 61 号

平成 25 年 1 月 9 日
手稲郷土史研究会会報

第 80 回（平成 24 年 12 月 12 日）定例会の講演要旨

「手稲区介護予防センター」の現況について

センター相談員 戸谷 慎子氏

手稲中央・鉄北介護予防センター所長 勝美氏のご挨拶につづき、戸谷氏の表やグラフ、数字をもとにした資料や現況報告など もりだくさんの講演でした。

開口一番「介護センターのことをご存知の方手をあげてください。（多数の挙手に満面の笑顔）今日は介護予防センターの CM に参りました。」

そんな元気な一声から講義が始まりました。



家族の形の変遷について・・・家族数と高齢化率 を人気のアニメをもとに解説

○サザエさん一家（波平ら 7 人家族）

1954 年 調査 高齢化率 4, 6%

○ちびまるこちゃん一家

1986 年（友蔵じいさんら 6 人家族） 高齢化率 7, 1%

○核家族化 クレヨンしんちゃん（4 人）、現在の 高齢化率は平成 23 年で 23% を越えています。

このように家族数は著しく減少しています。

ひと昔前は家族間で役割が決まっておあり、買い物や食事の仕度、力仕事など各々が分担して、お年寄りにも子守りなどがあり、家族が助け合って生きてきました。

今は独居の高齢者も多く一人でその労力すべてを担って生活せざるを得ない状況です。

手稲区の場合、高齢化率は平成 23 年度 21% です。

そのうち 8 割が要支援、要介護認定を受けていない元気な高齢者です。

そして元気がない高齢者《二次予防高齢者》の方も 5% おられます。こういった方に情報をお知らせすることも予防センターの役割です。

総合相談支援、介護予防事業の実施、啓発をしておりますのでまずは区内のセンターや各種予防教室などにお気軽にご参加ください。

* * *

数字をもとに大変内容の濃い、重いテーマでしたが知り得たものが多い講義でした。

その後の質疑応答で「どの教室も女性の方が過半数です。男性の方も参加してください」の呼びかけに当会員より「新聞紙を丸めたチャンバラなどがあれば面白いのだが」との声が上がりました。確かに競争社会を生き抜いてきた人たちには順位やゲーム性があればそれが活力になって参加する人も増えるだろうと私には思われました。

私も目的地のないウォーキングマシンよりも缶けりをしたいと思いました。

（文責 高木秀子）

次回の予定

次回（2 月 13 日）は、鈴木清士副会長の研究発表「軽川小訓導岩田利雄の歩み」と研究グループ「『手稲ふるさと文芸』を探る会」の研究報告を予定しております。会場は、視聴覚室です。

第 6 回歴史年表 学習会資料より

資料提供：茂内義雄氏

前田遞相小樽へ

昨日札幌發小樽を訪問し

夜行にて直ちに歸途に就く

定山溪一泊 前田遞相一行は宮尾長官阿部札遞局長外十六名の案内にて十七日午後二時定山溪着前田遞相は拓銀俱樂部に一泊其他は鹿の湯俱樂部に宿泊せるが遞相は定山溪の風光明眉なるを賞し十八日午前七時三十五分發臨時列車にて札幌に向へり（定山溪電話）

一行輕川へ 昨日午前九時廿八分札幌驛を出發したる前田遞相一行は宮尾長官阿部遞信局長薦田札幌警察署長瀨藤札幌支廳長橋本理事官三橋警部篠原刑事部長菅井齋藤兩遞信局書記同伴戸石本社員佐々木樽新記者も又一行に加はり同九時四十七分輕川驛に到着したるが中崎下手稲村長は札幌驛迄出迎へ驛前には農場管理人中野亮氏並に竹内靜勝氏近藤造林會社長其他村有志小學生徒の出迎えあり其より前田農場事務所に至りたるが同農場茨戸分場に數年前より在住の遞相の令弟定久氏も來場し一同事務所の客室に休憩、農場産の馬鈴薯や新鮮なるバター及牛乳に舌鼓を打ち此間遞相は若干の揮毫を試みたる上記念撮影をなし中野氏及令弟の案内にて場内を視察し終りて再び輕川驛より多數の見送り裡に十一時二十三分輕川發小樽に向へるが中崎村長は錢函驛迄見送り又小樽より石川縣人會を代表し川原直孝三つ山常吉、野口喜一郎、岩田秀三、市川外茂次の五氏輕川に遞相を迎へ燻製魚類を寄贈し池野小樽警察署長渡邊小樽局長錢函

驛迄出迎へしたり斯て遞相は途中各驛共有志の送迎を受け南小樽に到着したり（戸石特派員）

小樽の陳情 小樽市に於いて前田遞相の來樽を機とし郵便法の改正、花園局電信取扱いの復活、入港船を小樽に通報する機關として祝津燈臺に電話架設の件等を陳情したり

（北海タイムス 大正二年五月一九日）

札樽國道開鑿

期成會の設立

札樽間の國道開鑿に就いては先に小樽郡朝里外三村有志より道廳に陳情する所ありたるも實現の域に達せざるを以て沿道村民に利害する所大なりとし札樽兩區並に前期朝里外三村の主なる地主、小作人等協力し札幌間國道開鑿期成同盟會を新設貫徹に努むる事と為りたるが會長には奥村數次郎氏選舉されたり

（北海タイムス 大正二年五月一九日）